

2008.10.20



白門技術士会

ニュースレター vol.6

会員の皆様へ

このニュースレターは、会員相互の情報交換を目的に、会の活動内容とともに会員個人の様々な活動などについてお知らせするものです。

今回は、これからの白門技術士会の行事予定と、本会会長の金川護さん、副会長の渡邊潤三さんによるエッセイをお届けします。

金川さんは、「最近感じたこと」と題して電車内でのマナーを通じて考えられたことと、バーチャルウォーターなる言葉について感じたこと、を書いてくださいました。また、渡邊さんは、「江戸時代の転生物語」と題して多摩キャンパスゆかりの不思議な物語を紹介してくださいました。みなさんは、どのように感じ、どのような感想を持たれるでしょうか。

では、ニュースレターをお楽しみください。

会員からの記事を募集します。個人の活動内容、エッセイなど、ニュースレターに掲載したい記事がありましたら、奮ってご応募ください。

白門技術士会行事予定

	行事	日程	内容
1	白門祭出店	11月1日(土)～ 11月3日(月)	場所：中大理工学部6号館ロビー
2	応用化学科(加茂先生)技術士ガイダンス	11月18日(火)	場所：中大理工学部 加茂先生授業の1コマ 講師：加茂先生、金川会長、林幹事長、 荻野幹事、大澤幹事
3	技術士資格ガイダンス キャリア支援課主催 白門技術士会後援	11月27日(木)	場所：中大理工学部 担当：小林幹事、笹尾幹事、ほか
4	CO ₂ 環境対策技術研究会 第2回研究会・見学会	12月4日(木) 13:30～15:00	場所：東京都下水道局みやぎ水再生センター
		16:00～17:30	場所：東京家政大学 演題：有機性廃水の汚泥減容化 講師：(株)サピエナント社長 松本成樹氏

	行事	日程	内容
5	講演会	2009年1月	場所：中大理工学部 演題：未定 講師：鶴見大学 岡田靖教授

エッセイ - 1

「最近感じたこと」：金川護（上下水道部門）

その1 社会の弱者は誰？

8月初めのある晩、会合が終わって大手町で地下鉄を千代田線から半蔵門線に乗り換えました。電車に乗り込み席に座ろうとしたら、若い人が早足で来てサッと座りました。その隣が空いたので、私は腰掛けました。すると左の人の膝にぶつかりましたが、何とか座れました。その時左の人と右の人が同時に「無理、無理」と言います。私は「年寄りだからいいじゃない」と言いました。私の直前に座った右の人が「ちー」と言って立ち上がりどこかに行ってしまいました。

見ると電車は満員なのに椅子には6人が座っていました。7、8人座れるシートなのに6人掛けで良いのか、と書いていたのですが、回りは皆眠っていました。知らん振りして目を閉じていただけかもしれませんが、1人があと5センチつめればもう1人座れるのに、皆知らん振りです。次の駅から乗ってきた人も、「詰めて下さい」とも言わず、黙って立っています。私も周りが眠っているので、何も言わないことにしました。何で30代、40代の方がこんなに不親切なのだろうか、人々は何も言わないのだろうか、と暫らくの間考え込んでしまいました。

それから1週間ほどした朝10時頃、私は青葉台の駅から田園都市線に乗り、ホームで2列に並んだ先頭の左側に居ました。私の右側には20代前半の女性が立っていました。電車が来るとその女性はサッと乗り込み、空いている席に座りました。その隣の席も空いていたので、その席に私は座ることが出来ました。

でも、エー、何で若い女性が脇目も振らずに、われ先と席に座るのかな、と考えてしまいました。そこでハッと気が付きました。そうだ今の若い人は定職に就けずアルバイトや派遣社員など非正規雇用者と言って社会的弱者（本当は経済的弱者）に数えられているんだ、全ての若者ではないが、かなりの人が老人や身障者と同様の社会的弱者と思われているのではないのだろうか、だからそれを当然と思っているのではないか、と納得してしまいました。

その流れが30代、40代の男性にも波及し、他人が座れそうでも席を詰めない等、自己中を演じていると思いました。まさに都会では年代を問わず全員が精神的な社会的弱

者になってしまっていると思います。やはり日本国が弱体化している証拠です。何とか政治を良くして、経済も教育も良くしなくては国際的劣等人に成り下がるのではないかと感じました。

その2 バーチャルウォーター

最近、新聞やテレビで大学の先生や評論家が「日本は食糧の輸入大国ばかりでなく、大量の水を輸入している。早魃で苦しむ外国の水を何百億トンも日本に持ってきている。これはバーチャルウォーターだ」と言い、日本は水で外国を苦しめているように言っております。初めは私もその通りだな、と思っておりました。しかし、野菜を1kg輸入してもその水分はせいぜい0.8kgくらいです。おかしいと思いはじめました。1kgの野菜を育てるのに1000kgくらいの水は必用かもしれません。しかし野菜中の水分は0.8kgくらい、あとの999.2kgの水は日本には来ていません。現地で蒸発して雨になったり、地面に潜って又地下水や川の水になったりして、現地の灌漑や飲料水となって何回も有効利用されているはずです。ですから日本は食糧を輸入しても、バーチャルウォーターなど輸入していません。

ひるがえって考えると、日本は工業製品の輸出国です。半導体チップ1個にどれだけの水が使われているでしょう。おそらく1トンくらいの水が使われています。鉄鋼でも自動車でもテレビや精密機械でもその1kg当り1トン以上の水が使われているでしょう。しかし、工場では水をリサイクルし、使った水の1%も工場外に排出しておりません。即ち水は有効利用され、工業製品には見かけ上一滴の水も付かないで輸出されています。でもバーチャルウォーターとして見たら日本はまさに何百億トンもの水の輸出国になります。そんな変な話はありません。もし外国がバーチャルウォーターの金を払えと言って来たら、日本も負けずに金を請求しても良いと思います。バーチャルウォーターなどのふざけた考えは何所から来たのでしょうか。経済学者が考えたのか、或いは日本の学者が自虐的に考えたのだろうか、と思いました。

以上

エッセイ - 2

「江戸時代の転生物語 - 事件は多摩キャンパスの敷地内で起こった - 」:

渡邊 潤三 (総合技術監理部門、機械部門、建設部門)

今を去ること約二百年前、江戸時代後期文化・文政の頃、国学者平田篤胤の著作で有名になった事件です。舞台になった場所が多摩キャンパスの一隅(正門のあたりか?)で、中央大学とかかわりがありますので、私なりの解釈で要約してご紹介します。秋の夜長に、「江戸時代のオカルト物語」のあらましをご一読頂ければ幸いです。

この物語の主人公勝五郎が現世に生まれ変わる前の人物・・・藤蔵は、文化2年（1805年）武蔵国多摩郡程窪村（現日野市程久保）で生まれた。翌年、藤蔵の父久兵衛が亡くなり、半四郎が入り婿となり藤蔵を養育したが、文化6年、藤蔵は当時の流行病「疱瘡（ほうそう）」にかかり亡くなった(当時6歳)。

その後6年を経て文化12年、勝五郎が武蔵国多摩郡中野村（現八王子市東中野）で父源蔵と母せいの中に生まれ、この事件が展開する。勝五郎は、長ずるにつれ脳裏に焼きついた不思議な記憶・・・自分が生まれる前の怪しい事件の記憶に悩まされ続けた。「他人に話しても誰も信じてくれそうにない、話せば狂人扱いされるに違いない」と自分だけの秘密にしていた。

しかし、「もしかして兄や姉も生まれ変わっているのかもしれない」とも思われるので、8歳になったある日、田んぼで一緒に遊んでいた兄と姉に

「兄さんたちは、今の家に生まれる前は、誰の子供で、どこで生まれたのか」と訊ねてみた。兄も姉も、

「生まれる前のことを知っているはずがない。おかしいことを聞く子だ」とあざけり笑われ、逆に

「それでは勝五郎は知っているのか」と訊ねられた。勝五郎は

「自分は前世のことをよく知っている。もとは、程窪村の久兵衛という人の子で、名を藤蔵といった。やがて、父久兵衛が亡くなり、継父半四郎と母しづに育てられたが、6歳で亡くなった。私（勝五郎）は、藤蔵の生まれ変わりである。しかし、この話は親には決してしてくれるな」

と頼んだ。兄・姉も

「両親には黙っていよう。しかし、勝五郎が悪いことをして、私達の言うことを聞かぬときは親に話す」

と釘をさした。

その後、兄弟喧嘩をする度に

「あのことを親に話すぞ」

と兄姉が言うと、すぐ勝五郎は喧嘩を止めるので、両親・祖母が不審に思い問いただしても、勝五郎は包み隠して言おうとしなかった。ひそかに姉を問い詰めると、姉は隠しきれずありのままに喋ってしまった。両親・祖母が、勝五郎をすかしたり脅したりして追及すると、しぶしぶ勝五郎が「生まれ変わり」の一部始終を話し始めた。

勝五郎が幼い言葉で伝えるあまりにも奇怪な物語に両親・祖母は仰天するが、信じられず、とりあげなかった。その頃、勝五郎の下に妹が生まれ、母は妹に乳を飲ませるため、祖母つやが勝五郎に毎夜添い寝をしていた。

ある夜、勝五郎が

「程窪の半四郎方へ連れて行って欲しい。向こうの両親に会いたい」と言い出した。祖母はおかしな話の続きはご免と言葉をにごらせていたが、その後も毎夜のように「程窪へ行って半四郎に逢いたい」とせがまれるので、「それでは、生まれた始めからのことを詳しく話しなさい」と言うと、勝五郎は拙ない言葉ながら、生まれ変わりの顛末を詳しく話した。

(原文では、藤蔵(勝五郎の前世の名)が亡くなった後、藤蔵の魂が肉体から遊離し、自分の葬儀の模様を眺めたり空間を彷徨ったりした後、ある老翁に導かれて中野の半四郎の家に辿りつき、母の胎内に宿るまでの話が続きませんが、長くなるので省略します。)

勝五郎が顛末を話した後、祖母は近所で老人の集まりがあった際に

「もしや程窪村に久兵衛という人がいたということを聞いた人はいないか」と尋ねてみた。すると、その中の一人が「自分は知らないが、程窪村に知り合いがいるから問い合わせてみよう。それにしても、何故そんなことを聞くのか」と訊ねられ、理由を説明せざるを得なくなり、事件のあらましを喋ってしまった。この話は忽ち多くの人に知れ渡り、勝五郎が外へ出れば皆が珍しがり、「程窪小僧」と仇名をつけて囃したてるようになった。そのため、勝五郎はその後、外出せず家に引きこもるようになった。半四郎方へ行きたいという勝五郎の思いは更に強くなり、夜もすがら泣いていることが多かった。

祖母は、「これほどまでに思っているのなら、絵空事であるにしても、連れて行けば勝五郎は納得するだろう。また、私が連れて行けば、他人からあざけり笑われても、老女のことだからということで済むだろう」と決心して勝五郎を連れ、程窪村を訪ねた(程窪村と中野村とは山一つへだてて一里半... 6キロメートルほどの道のりであった)。やがて、勝五郎は「この家である」と祖母より先に一軒の家に駆け込んだ(これより前、程窪の半四郎の家は三軒並んだ中の家で裏口から山に続いていると勝五郎が言っていたとおりだった)。

半四郎夫婦は、人伝てに聞いていた勝五郎の生まれ変わり物語の詳細を直接聞いて、怪しんだり、悲しんだり、ともに涙にくれ、勝五郎を抱きあげる。つくづく勝五郎の顔を見て、亡くなった藤蔵の6歳の時の面影に実によく似ている、など様々なことを話した。勝五郎は抱かれたまま向かいの煙草屋の屋根を指差し、「以前はあの屋根はなかった、あの木もなかった」など言うのがすべてそのとおりで、勝五郎の記憶に間違いのないことが分かり、偶然の一致とも思われず、皆が驚き世間の評判になった。

以上が「勝五郎転生物語」のあらましですが、その後の経過は次のようなものです。

- ・文政6年4月、勝五郎親子が本郷湯島の国学者平田篤胤の「気吹乃屋(いぶきのや)」を訪ね、篤胤と友人の漢学者伴信友らに生まれ変わりの顛末を語り、同年6月篤胤が「勝五郎再生記聞」をまとめた。その後、宮中に同著を献上し、女房たちに読み回され大評判になり、多くの写本がとられた。
- ・明治30年、小泉八雲(ラフカディオ・ハーン)が随想集に「勝五郎の転生」を記し、ロンドン・ボストンで出版、海外にも東洋のオカルト事件が知られるようになった。

以 上

(編集：白門技術士会広報部会)